



日台稻門会

NEWS LETTER 第11号

平成 18 年(2006 年) 民国 95 年

12月20日 発行

発行 日台稻門会事務局

編集 白鳥・石川・小野間・齋藤

師走も間近になりましたが、皆様年越しの準備は如何ですか。また、日台友好は如何だったでしょうか。益々絆が深まったという方が多かったと思います。さて日台稻門会ニュースレター2006年冬号をお届けします。

◇ 日台稻門会・台湾校友会NEWS ◇

早稲田大学台湾校友会年次総会 盛大に開催される

(11月25日(土) 台北) 圓山大飯店10樓 四川料理「松柏廳」)

早稲田大学台湾校友会年次総会が平成18年11月25日(土)18:00より台北圓山大飯店10F松柏庁にて開催されました。

日本からは白井総長、各地域稻門会代表・会員が参加、台湾校友会校友を含め総勢約120名出席の盛会でした。

謝南強会長の挨拶で開会し、白井総長、各稻門会会長など来賓の祝辞が続き、台北稻門会高橋会長の乾杯で第二部の晚餐会が行われました。来賓テーブルには許世楷代表処代表、羅福全亜東協会会長も着席され、各所で日台の会員同士の熱い交歓と記念撮影が延々と続きました。

謝南強会長は2期6年間校友会会長を勤められ、今大会を持って退任されることになりました。新会長は今大会で選出された理事会で選出される予定です。

最後に行政書士稻門会副会長の山下政行さんのリードで全員が都の西北を合唱し散会しまし

た。来年の年次総会は台中で開催の予定です。

日台稻門会からは白鳥会長の他11名の会員が参加しました。

翌日26日は校友会主催の娯楽活動で、ゴルフは老淡水、旅行は宜蘭五結国立伝統芸術中心への観光が催されました。ゴルフコンペには白井総長も参加され、準優勝に次期会長に内定の董さんが入賞、表彰式を大いに盛り上げました。

台湾校友会総会の前日夜、台北稻門会と日台稻門会の懇親会が台南館で開催されました。

当会から6名、台北稻門会から8名合計14名が集まり、久しぶりの再会に大いに花が咲きました。美味しい台湾料理と紹興酒でゴルフ早慶戦の話題、最近の台湾情勢、懐かしい駐在時代の話題等等、台湾大好き人間同士時間を忘れ大いに食べ、飲み、語り合い、翌日の校友会総会での再会を約し散会しました。(事務局 小野間記)



後列より 山下、川村、神田、小野間、藤井、江、前列 羅、白鳥、許、白井、謝、丸山の皆さん(敬称略)

◇ 会員動向 ◇

新入会員の川村さんから寄稿頂きましたのでご紹介します。

本年8月に日台稲門会に入会致しました。台湾での駐在経験はありませんが、過去何年かアジア関係の仕事をしておりました。その関係で、20年ほど前から台湾を何度も訪問しております。初めて台湾を訪れた時は、まだ全土が戒厳令下であり、カラオケに行くにもパスポートは必携と、それなりの緊張感もあった時代でした。蒋経国総統が亡くなり、戒厳令解除となった頃は、連日のようにデモが行われ、台北市の中心部も騒然としていたように思います。

当時、台湾は韓国、香港、シンガポールと並ぶ4つのドラゴンまたはNIE Sと呼ばれ、急速な経済発展を遂げつつあるアジアのパワーの一角を担っていました。今年2月にも、ある調査案件

で台湾の主要大学と研究機関を取材しましたが、現在はハイテク・半導体関連産業の競争力が経済の支えとなっています。

ただ、この取材で心配だったのが日本との人的な繋がりが薄れていることでした。現状では、台湾の若い世代の方々が将来のキャリアを考えた場合、留学先として選ぶのは米国のようなようです。今後の台湾の将来を担っていく方々の目を、もっと日本に向けてもらうために、日台交流のパイプを太くするために、微力ながら貢献したいと思えます。

皆様今後とも宜しくお願い致します。

川村 淳一（昭和55年政経政治卒）

◇ 早稲田と台湾のNEWS ◇

游錫堃・民進党主席が早大で講演



10月24日～28日まで訪日中だった游錫堃・民進党主席は同25日、早稲田大学の招きにより同学内で講演を行った。行政院長（首相に相当）、総統府秘書長（官房長官に相当）を歴任した游錫堃氏はこの日「台湾の生存への道」と題し、講堂に集まった学生や教師ら150人以上を前に講演し、台湾海峡の現況や東アジア

地域を取り巻く国際情勢などについて語った。2時間近くとなった講演会では、出席者から盛んに質問が寄せられ、台日関係に対する学生らの高い関心が伺えた。また早大の卒業生で元総統府国策顧問の金美齡氏も駆けつけ、台日交流に対する游氏の積極的姿勢に敬意を表した。游氏ら一行は10月24日～28日まで5日間日本を訪問しており、25日は講演前に白井克彦総長を訪問して台日関係の増進などについて意見交換したほか、日本の野球界で活躍する張誌家選手を訪ね激励した。

陳水扁総統、日本とTV会議

早稲田大学台湾研究所が主催するテレビ会議が10月30日、日本と台湾を結んで行われ、陳水扁総統が出席した。テレビ会議は、東京都内のホテルと台北の総統府とを直接インターネット回線で結び、同日午前10時より約2時間にわたって行われた。会議には、平沼赳夫・日華議員懇談会会長、中川昭一・自民党政調会長、池田元久・民主党日台友好議員懇談会会長をゲストに招き、中嶋嶺雄・国際教養大学学長の司会のもと、日本のメディア関係者およそ100人が出席し、活発な議論がなされた。安倍新政権下における台日関係

やアジア外交に関し、日本の国会議員、学者およびメディアの代表らと幅広いディスカッションを行った。

会議では、まず主催者である西川潤・早稲田大学台湾研究所所長が「本会議で率直に意見交換し、これを通して日台関係の基軸となるような未来像を提示してほしい」と挨拶、その後陳総統が約15分間スピーチを行い、それに続きゲストが約5分間ずつ意見を述べ、最後に出席したメディアから陳総統に対し質疑が出され、総統がこれに応える形で行われた。

台湾新幹線、3度目の開業式典延期

12月7日に予定されていた台湾新幹線の開通式が再延期された。来月の開業を前に列車や点検車両が脱線事故を起こすなどの様々なトラブルが相次ぎ、今回が3度目となる開業の延期に追い込まれた。高速鉄道を管轄する交通部は、営業許可が早くても12月下旬になると明らかにしていたが、開通式は来年1月以降にずれ込むものとみられている。

台湾新幹線は台湾が総事業費1兆5000億円

森元首相、陳總統から勲章を授与される

森喜朗元首相は11月22日、総統府で、日台の友好関係を促進するため長期にわたり尽力した功績により陳水扁総統から「特種大綬景星勲章」を授与された。森元首相は陳總統に謝意を表すとともに「今日は生涯最高の栄誉ある日。今後も日台関係の発展に努力したい」と喜びを語った。

陳總統は、森氏が2001年の首相時代、中国の圧力にもかかわらず李登輝前總統の訪日を受け

台北市・高雄市長選挙 民進党が善戦

中央政府直轄市の台北市・高雄市の第4回市長選挙、第10回台北市議会議員、第7回高雄市議会議員選挙が9日に行われ、即日開票された。台北市は中国国民党の郝龍斌候補（54）＝元環境保護署長（環境相）＝、高雄市は民主進歩党の陳菊候補（56）＝前労工委員会主任委員（労相）＝が当選した。中央委員会が発表した得票数や得票率などは以下の通り。

■台北市長選の得票数と得票率

有権者数：200万8434人、投票率：64.52%（2002年投票率：70.61%）

○郝龍斌・男692,085票（53.81%）中国国民党、謝長廷・男525,869票（40.89%）民主進歩党、宋楚瑜・男53,281票（4.14%）無所属、李敖・男7,795票（0.61%）無所属、柯賜海・女3,687票（0.29%）無所属、周玉箴・女3,372票（0.26%）台湾團結聯盟

■高雄市長選の得票数と得票率

有権者数：114万110人、投票率：67.93%（2002年投票率：71.44%）

○陳菊・女379,417票（49.41%）民主進歩党、黃俊英・男378,297票（49.27%）中国国民党、

をかけた大型プロジェクトで台北と板橋の約7キロを除く、板橋－高雄区間では11月下旬から試運転がはじまっており、完成すれば最高時速300キロで台北～高雄間の345キロを約90分で結ぶようになる。

開通式には小泉前首相ら日本の政財界の大物を数多く招待している。内外の有力者を招いた式典も延期されることになった。

入れたこと、また台湾から日本への観光客に対するノービザ措置恒久化をはじめ、世界貿易機関(WTO)や世界保健機関(WHO)など国際組織への台湾の加盟に惜しみなく協力し、日台関係の促進において多大なる貢献をしたとして、最高の栄誉を象徴する「特種大綬景星勲章」を森氏に授与した。

羅志明・男6,599票（0.86%）台湾團結聯盟、林景元・男1,803票（0.23%）無所属、林志昇・男1,746票（0.23%）保護台湾大聯

台北市議会議員選挙は、最大野党・国民党が前回（2002年）より4議席増やして24議席を獲得。与党・民進党は前回より1議席多い18議席に。第二野党・親民党は6議席減らして2議席、新党は1議席減らして4議席。台湾團結連盟は前回の無議席から2議席を獲得した。無党派その他が2議席。台北市議会は合計52議席。台北市議会議員選挙の投票率は前回2002年の70.65%より6.11ポイント低下し、64.54%となった。

高雄市議会議員選挙でも国民党が17議席を獲得、前回の12議席から躍進して高雄市議会第一党に躍り出た。民進党は1議席増やして15議席、親民党は3議席減らして4議席、台湾團結連盟は1議席減らして1議席、無党派などが7議席となっている。民進党は市長ポストを死守したが、市議会運営は難しくなった。高雄市議会は合計44議席。

*親民党の宋楚瑜主席（64）は9日、台北市内で会見し、「台湾政界から引退する」と表明した。

***特別企画：**

【法学博士・林 秀雄先生 講演抄録】「台湾における妾の法的地位」

講師 林 秀雄 先生（国立政治大学法律系教授）

（講師略歴）

学 歴：輔仁大学法学士（1975年）、日本明治大学法学修士・博士（1983年）

現 職：国立政治大学法律系教授（前政治大学法学院院長）、台湾の身分法と国際私法の代表的学者としてご活躍

日本との関わり：明治大学より法学博士授与、東京大学法学部客員研究員

（一）日本最高裁昭和32年9月27日小法廷判決は妾の定義について、次のように説明している。

『おもうに妾若しくは二号という概念は今日必ずしも明確ではないのであるが、通常「法律上の妻又は事実上の妻でなくして、主として妻帯の男性から経済上の援助を受けて、これと性的結合関係を継続する女」をいうものと観念してあやまりないであろう。わが国において妾をもつ習俗は古くから主として血族維持を根本基調とする「家」の制度と密接の関係があるものとされ、法制上においてもいわゆる「妻妾二等親」としてみとめられて来たところである。明治時代になってからも、民法（明治三一年法律九号）によって初めて法律上から抹消されたのであるが、その後も社会の習俗としては広く行われていることは否定し得ないところである。殊に、時代の変転にともない性欲的享楽面を主とする関係への転落的傾向が顕著であって、一口に妾又は二号といっても、妻に近い性質を有するものから実質的には売春婦と認められるものまで各種各様の形態があるというのが現実の社会の実情である』。

中川善之助博士の考えによると、妾には旦那と生活協同体を作るという意識がなく、旦那のお手当てで楽に暮らして行き、旦那を迎えて喜ばせようという意識だけである。今日のお妾さん、二号さん、または愛人は昔の妾と違って、売笑婦に近いものとなって来た。

中国の昔においては、夫妻関係は準配偶者関係とされていたから、妾は夫の親族との間

に親族関係を生ずる。殖民地時代の台湾においては、中国の影響を受けて、妾を迎える旧慣があった。日本政府もそれを認めていた。判例は、妾が本島の旧慣に容認されているから、それを善良風俗に違反するものとしてはならないとしていた。（明治29年控294号、同年8月13日判決、大正10年上民77号、同年10月20日高等法院上告部判決、昭和10年上民88号、同年6月12日高等法院上告部判決）。そして、妾と夫の関係を「準配偶者関係」としていた（明治41年9月25日、判官協議会決議第2条）。

戦後、中華民国民法はそのまま台湾で施行されたので、中華民国民法によって作られた司法院の解釈または最高裁の判例が台湾にも通用することとなった。

1930年中華民国民法制定時、立法者は、妾制度は事実上まだ存在しているが、法律上、その存在を容認すべきではないと考えて、それを廃止した。何千年の歴史のある妾制度は現行民法に認められていないが、事実上存在していた。立法者は妾制度を民法の上に置かないが、司法者は事実上存在していた妾制度を全く無視することができない。従って、実務上、妾の法的地位に関するいろいろな判例または解釈例を作ったわけである。

司法院1932年院字第735号解釈によると、妾は家長と永久の共同生活を目的として、一家に同居する者である以上、民法第1123条第3項の規定によって、家族員とみなされる。つまり、いくらか妻のある男性から継続的な給付をもらって不倫な情事関

係を続けている女性は、その男（旦那）と永久の共同生活を目的として一緒に生活する

（二）判例は妾を迎えることを契約として、その合法性を認めて妾にいろいろな権利を与える。詳しく言えば、妾は家族の一員として、家長である夫に対して、扶養請求権を有する。夫がなくなってから、夫の本妻の子が家長になった場合、依然として、父の妾を扶養しなければならない（最高裁1932年上字第2238号判例）。また、男女平等の原則に基づいて、地位の低い女性を保護するために、妾が理由なしに自由に妾関係を解消することができる（最高裁1932年上字第1098号判決）。夫妾関係解消後、夫に対して扶養料を請求することができる（最高裁1

（三）判例または解釈例が妾契約の合法性を認め、妾を保護する理由はどこにあるか。おそらく、妾を社会中の弱者として取り扱っているであろう。つまり、民法は妾の身分を認めていないが、全然法律の外に放置することは、返って不当な結果を引き起す。大部分の妾は、自分が弱いからこそ、妾になっただろう。社会的な強者である夫と弱者である妾との関係に対して、法律が目をつぶれば、いつでも、強者が不当の自由を保って、弱者が正当の自由を失なう。従って、妾制度を認めていなくても、妾としたことによって、女性の生存が脅かされるようになった場合、その生存権を保障すべきだという最高裁または司法院の態度が窺われるであろう。

また、注目すべきは、妾の子はかなり保護されているということである。詳言すれば、「不孝有三、無後為大」という意識があり、後継ぎを得るために、あらゆる手段が合法化され、妾制度も男系血統の継続という理念の下で合法化されたものである。妾は、家族の一員として扶養されるものであり、生まれた

者ではないから、妾ではない。この点について、日本の「お妾さん」とは違う。

944年上字第4412号判例）。妾は配偶者ではないから、夫に対して相続権を有していない。司法院1947年院字第3762号解釈によると、夫の後妻は、婚姻の法的要件を具えていないため、その婚姻が無効であるが、夫に扶養されていたという事実に基づいて、親族会がその受けた扶養の程度及びその他の関係により、遺産を分与しなければならない。つまり、夫が死亡した場合、妾は民法第1149条の規定によって、遺産分与請求権を持っている。とにかく、妾は「準配偶者の身分から契約へ」の変化の中で、その地位は依然として保護されている。

子について父が不明という問題が起こらないし、妾の子は後を継ぎ祖先祭祀の義務をうけるものであるから、その地位が保障されていた。1930年に中華民法法の立法者は、国有の伝統を尊重し、妾の子の利益を保護するために、非嫡出子が生父の認知意思または養育の事実があれば嫡出子の身分を取得することができる」と規定している。とにかく、立法者が非嫡出子を保護して進歩的な認知制度を設けたことは、妾制度のおかげであると考える。

しかし、妾契約は、人としての尊厳を害し、性道徳に反し、社会の善良風俗を乱すのであるから、反社会性を有する。従って、その合法性を認めることは、不当だと思う。また、上述の司法院の解釈と最高裁の判例は、殆ど60年前に作られたものであって果たして今日の社会に合するかについては、疑問の余地がないではない。いずれにしても、妾が漸次に少なくなってきたことに伴い、これらの判例または解釈例の実用性も失いつつあると考える。

この抄録は去る8月28日、大隈会館において開催されました当会主催講演会の内容を林先生自らまとめられたものです。また林先生は講演料も辞退されています（寄付金として拝戴いたしました）。会員の皆様にはその旨ご案内するとともに、開催関係者一同、林先生に対し改めて深謝申し上げる次第です。

◆ 計 報 ◆

早稲田大学台湾校友会会長・謝南強氏のお母様が逝去されました

葬儀は9月9日（土）午前9時から、台北市の中山基督長老教会（台北市林森北路62号）で執り行われました。当会からはお花を献花いたしました。

周英明氏が逝去されました

当会でも度々講演頂いた台湾民主化運動でも知られる周英明（しゅう・えいめい）氏が11月9日午後7時5分、大腸癌のため東京都渋谷区の病院で逝去されました。享年73。通夜は14日午後6時から、葬儀・告別式は15日午前11時から代々幡斎場で厳かに執り行われました。喪主は長男、士甫（しほ）氏。当会より、告別式に白鳥会長、小野間事務局長が参列いたしました。

周英明氏略歴：昭和8年（1933年）福岡県八幡市に生まれ、同21年（1946年）台湾に帰国。同31年（1956年）に台湾大学電気工学科卒、兵役（空軍少尉）を終えた後台湾大学助手。同36年（1961年）27歳の時文部省（日本）国費留学生として東京大学大学院修士課程に留学、直ちに台湾独立運動に従事した。同39年（1964年）当時早稲田大学留学中の金美齡氏と結婚。同43年（1968年）東京大学大学院博士課程修了（工学博士、マイクロ波工学専攻）。同50年（1975年）台湾独立建国連盟日本本部委員長。月刊「台湾青年」発行人（孫明海）。東京理科大学講師、助教授、教授を経て、平成8年（1996年）理工学研究科長、社団法人回路実装学会会長。同12年（2000年）8月28日、40年ぶりに祖国・台湾の土を踏む。東京理科大学名誉教授（電気通信工学）、「日本よ、台湾よ」などの著書がある。



◇ 会合予告 ◇

平成19年講演会・新年会のお知らせ

『東京中日新聞・前台北支局長による台湾時事の夕べ』

日 時：平成19年2月16日（金曜日）

講演会 18：00～

テーマ：「台湾の時事問題」

講演者：佐々木理臣氏（校友）東京中日新聞
本社外信部編集委員、前台北支局長

会 場：大隈記念タワー（26号館）16階
校友サロン

新年の集い時間 19：00～

会 場：大隈記念タワー（26号館）15階
レストラン「西北の風」

会 費：5,000円

日台稲門会平成19年定期総会開催のお知らせ

『第11回日台稲門会定期総会・第8回日台稲門
交流の集い』

日 時：平成19年4月21日（土曜日）

①定期総会 15：00～15：40

②講演会 16：00～16：50

会 場：大隈会館3F 301号室

③交流の集い 17：00～19：00

会 場：大隈会館2F 201号室

会 費：会員・一般8,000円、学生無料

*会員以外の方も講演会・交流の集いには参加出来ますので、奮ってご参加下さい。

早稲田スポーツ

東京六大学野球秋季リーグ戦で3季ぶり38回目の優勝決定！

10月15日の試合で法政大学を降し、早稲田大学野球部の3季ぶり38回目の優勝が決定しました。

関東大学ラグビー対抗戦6連覇達成！

12月3日の早明戦において、明治大学を43-21で降し、早稲田大学ラグビー蹴球部の6年連続19度目の優勝が決定しました。

引き続き、全国大学選手権での史上2校目の3連覇に向けて、応援よろしくお願ひします。

◇ その他NEWS ◇

台湾の免許でも 日本で運転OK

日本を訪れる台湾の観光客が、台湾の免許証で車を運転できるようになるようだ。警察庁は道交法を改正する方針を決めたという。台湾側の要請を受けた措置で、台湾からの観光客が急増している北海道も(熱烈に)要望していた。

日本人が台湾を訪問した時も国内免許証の使用が可能になる。次期通常国会に道交法改正案を提出、来年度内の実現を目指す。

観光客など短期滞在の外国人が日本で車を運転できるのは、①道路交通に関する「ジュネーブ条約」に基づく国際免許証を所持している、あるい

は②その国・地域の免許制度が日本と同じレベルと認定された場合のみ。台湾はジュネーブ条約に加盟していないため、警察庁が昨年台湾の免許制度を調査していた。

しかし、しかし、日本人は台湾で運転できるか。あの交通マナーの真っ只中に我が身を置くことができるのか。ちなみに、編集子の駐台時代の運転心得は、負けない運転、捕まらない運転でした。

(人のこと言えませんね) 違反は一度しかありませんでした(全く自慢できない)。また車には常に銀紙を用意していました(意味がわかりますか)。

ボースの遺骨を祖国返還へ

インドの反英独立運動指導者チャンドラ・ボースの遺骨を、祖国に返還しようという動きがでてきた。

台湾で事故死したボースの遺骨は東京・杉並の

蓮光寺に安置されているが、日印協会会長を務める森喜朗元首相が遺族の要望を踏まえてインド側に働きかけており、過去に何度か提起された懸案が解決に向かう可能性も出てきた。

野球 日本「銀」 台湾にサヨナラ負け アジア大会

台湾8X-7日本(12月7日、アルラヤン球場)

オールプロの韓国を撃破するなど、破竹の快進撃を続けてきた日本のアマ集団だったが、決勝は台湾にシーソーゲームの大熱戦の末逆転サヨナラ負け。3大会ぶりの金メダルは成らなかった。

アマで編成された日本に対し、台湾はオールス

ターチームで金メダルを義務づけられていただけに試合前から気合十分。葉志仙監督は「優勝するんだという我々の決意を止められるものは何もなかった」と満足そう。チームには7050万台湾元(約2億5170万円)の報奨金が与えられるという。

大相撲 来年も台湾巡業を検討

日本相撲協会が来年、2年連続となる台湾巡業を検討している。台湾巡業は今年8月に台北で開催され、2年連続で同じ国での海外巡業が実現すれば史上初。今後、理事会などで検討し実現の可

否を決定するという。



江正殷助教授の台湾紹介記事が『早稲田ウィークリー』（web版）に掲載されました、是非ご覧ください。
<http://www.waseda.jp/student/weekly/contents/2006b/112p.html>

世界見聞録 第14回 台湾の名前
もう一つの“台湾” フォルモサに隠された宿命

アクセス方法: 検索で 早稲田大学 <http://www.waseda.jp> を開き、「卒業生の方」「早稲田大学 - 校友ホームページ - <http://www.waseda.jp/alumni/index.html>」「早稲田ウィークリー」「世界見聞録: 第14回 台湾の名前」で辿り着けます。更新されている場合は、「早稲田ウィークリー」に戻って、「グローバル世界見聞録」「(14)台湾の名前」(バックナンバー)で辿り着けます。

2007年(民國96年) 祝祭日一覧

ご旅行の参考にしてください。

1月1日(月) 開国記念日
2月18日(日) 春節 旧正月元旦、大晦日(農曆除夕) 2月17日より2月25日まで9連休
2月28日(水) 228和平記念日
4月5日(木) 清明節「民族掃墓節」4月6日は調整休暇として4月8日まで4連休
6月19日(火) 端午節(農曆5月5日) 6月18日は調整休暇として6月16日から4連休

9月25日(火) 中秋節(農曆8月15日) 9月24日は調整休暇として9月22日から4連休
10月10日(水) 国慶節「雙十節」
※祝祭日以外の記念日(国定休日ではない): 3月4日(農曆1/15) 元宵節、3月8日婦幼節、3月29日青年節、5月1日労働節、9月3日軍人節、9月28日孔子誕生記念日(教師節)、10月25日光復節、10月31日蔣前總統誕生記念日、11月12日国父誕生記念日(中華文化復興節)、12月25日憲法記念日、等

◇ 編集後記 ◇

弧蓬万里(呉建堂)氏編・著の『台湾万葉集【後編】』に黄靈芝氏が紹介されている

野良猫に餌をやりしが運のつき、子をひきつれて遷り来るとは

小欄には素養がないのでうまく云えないが、台湾日本語族の営為の中に澁む悲哀という印象があった。

さて既報のように、その黄靈芝(本名・天驥)氏(78)に日本政府が11月3日付けで旭日小綬章を授与した。昭和47年の断交以後、途絶えていた台湾人への叙勲が昨春の、蔡茂豊氏(*1)への旭日中授章授与で復活、同秋の李上甲氏(*2)への旭日小綬章に続き3人目となる。日本政府の英断に素直に拍手を送ると共に、内田勝久・前日本交流協会台北事務所長の拓かれた道が、脈々と続いていることを力強く思う。

黄氏は平成16年11月に『台湾俳句歳時記』で第3回正岡子規国際俳句賞を受賞しているが、小説、詩、彫刻などの分野で輝かしい業績を上げている。それにしても、日本語を操ることの自由闊達さは如何ばかりであろうか。戦後教育の中途半端な日本人である小欄が語ることは許されず、黄氏の言葉を引用することとする。「よく聞かれる。言葉を奪われたことをどう思うか、と。だが、世界の歴史を繙けば、ある国が他国を侵略し、ある民族が他民族の言語を奪うとなど、当たり前前に繰り返されてきたことだ。弱者が強者に逆らえるはずもない。今さら何を言うつもりもない。私は日本語で考え、学び、創作してきた。妻は私に台湾語で小言を言い、それを息子が北京語でなだめる。何の不自由もない。私は多分、今後も日本語での創作を続けるだろう。誰のためでもなく、ただ自分のためだけに。」

編集後記としては落第ですが、台湾日本語族の皆様の生き様を紹介するため、敢えてお話させて頂きました。黄先生、おめでとうございます。

*1 蔡茂豊氏(元東呉大学外国語学院院長、日本語教育学会初代理事長)

*2 李上甲氏(財団法人台日経済貿易発展基金会董事・常任特別顧問、台日商務協議会秘書長)